

上智大学国連WEEKS シンポジウム

キリスト者として

グローバルな活躍を

国連事務次長、イエズス会司祭らが発題

上智大学は2014年から、「国連の活動を通して世界と私たちの未来を考える」を基本理念に、「国連WEEKS」としてさまざまなイベントを行っている。今年は10月6日から24日までを国連WEEKSとし、12日には、ニューヨーク本部から国連75周年記念担当国連事務次長フアブリツィオ・ホスチャイルドさんを迎え、オンラインシンポジウム(ウエビナー)を英語(通訳なし)で行い、約400人が参加した。上智大学人間の安全保障研究所が主催し、国連広報センターが協力。日本側からは、佐久間勲神父(学校法人上智学院理事長)、サリ・アガステイン神父(上智大学総合グローバル学部教授)らが参加した。



COVID-19以後の国連の課題について話すホスチャイルドさん

冒頭あいさつで佐久間神父は、10月24日に75周年を迎える国連に祝辞を述べ、上智大学が国連とつながることの意義を語った。2019年11月に教皇フランシスコが来日し、上智大学を訪問した際のメッセージ「『叡智の座の大学』で『学ぶ者へ』から『現代世界において貧しい人や隅に追いやられた人とともに歩むこと』です。自らの使命に基軸を置く上智大学は、社会的にも文化的にも異なることを考えられているものをつなぎ合わせる場となることについて開かれているべきで

す」という言葉を引用し、上智大学の使命を強調した。

次にホスチャイルドさんが基調講演を行った。最初に、国連WEEKSのイベントを主催し、意欲的に動く上智大学に感謝の意を伝え、国連が75年前、2度の世界大戦の「灰」からスタートし、持続可能な世界のために働いてきた経緯について話した。

COVID-19で大いに揺れた国連75周年の今年は、総会中の9月21日に世界中の国家と政府の元首がオンライン上で集まり、感染症、気候変動などについて話し合ったことをホスチャイルドさんは伝えた。

「COVID-19は、確実に私たちの健康と経済に影響を与え続けています。気候変動の影響は、報告は少ないものの、社会的不平等、地政学的緊張など、地球に大きな被害をもたらしています」最後に、「私たちはまさに国連が強調する多国間主義の後退を目的にしています。超大国間の摩擦とライバル関係が復活し、孤立主義、そして場当たり的な、目的を同じく

する国家間の同盟の變化、そして全般的に多国間主義の倦怠感が広くもたらされています」と現状を語った。

国連75周年事務局のセシリア・カノンさんは、国連に関する統計調査の結果を発表した。調査は193加盟国全てで行われ、100万人以上からの回答を集めた。

それによると、回答者の60%は、「国連が世界をより良い場所にした」とし、74%は「国連が世界の直面する課題に取り組み上で不可欠である」としている。特に若者、40歳未満の人、男性よりも女性の方が、国連を受け入れる傾向がある。

上智大学からも1727の回答があった同調査の結果では、パンデミック(世界的大流行)直後の最優先事項として、上智大学生は「医療の利用」を挙げ、海外全般の回答と同じ傾向だった。日本全般と東アジア・東南アジアは「世界的連帯」を挙げた。今後25年に求められる事項として、上智大学生と日本全般は「紛争の減少」を、東アジア・東南アジアと世界全般は「環境保護」を挙げた。

学生からの発題も

学生からのレスポンスとして、マレーシア国立大学のアレクサンドラ・プルデンテさんは、森林火災や洪水などによる自然環境の劣化、野生生物の生息地の喪失、開発による土地の収奪など、ボルネオ島の惨状を語った。

本シンポジウムの企画や交渉を行い、司会も務めた上智大学教授の東大作さんは、「今日、世界中で400人がつながっています。技術的につながることが可能なのです。問題は、私たちが連携できるかどうかです」と話した。

インド・ケララ州の出身で紛争解決を専門とするサリ・アガステイン神父は初めに、「この世界をより良いものにするために、人類に75年間奉仕してきた国連に敬意を示した。今回のパンデミックに対する人々のイメー

ジが、地球温暖化と武力紛争であることを指摘し、保護主義と孤立主義、排外的ナショナリズムが近年優勢であることを憂慮した。アガステイン神父は、インドの経済学者アマルティア・センや、UNHCR(国連難民高等弁務官事務所)で働いた緒方貞子の例を挙げ、「キリスト者として、いかにしてグローバルな視点を実装し、どのような方法で活力に満ちた『グローバルプレーヤー(世界的に活躍する人物)』になるかが重要です」と今後の課題を語った。

今回のパンデミックに対する人々のイメージが、地球温暖化と武力紛争であることを指摘し、保護主義と孤立主義、排外的ナショナリズムが近年優勢であることを憂慮した。アガステイン神父は、インドの経済学者アマルティア・センや、UNHCR(国連難民高等弁務官事務所)で働いた緒方貞子の例を挙げ、「キリスト者として、いかにしてグローバルな視点を実装し、どのような方法で活力に満ちた『グローバルプレーヤー(世界的に活躍する人物)』になるかが重要です」と今後の課題を語った。

今回のパンデミックに対する人々のイメージが、地球温暖化と武力紛争であることを指摘し、保護主義と孤立主義、排外的ナショナリズムが近年優勢であることを憂慮した。アガステイン神父は、インドの経済学者アマルティア・センや、UNHCR(国連難民高等弁務官事務所)で働いた緒方貞子の例を挙げ、「キリスト者として、いかにしてグローバルな視点を実装し、どのような方法で活力に満ちた『グローバルプレーヤー(世界的に活躍する人物)』になるかが重要です」と今後の課題を語った。